2027 年 3 月期 第 1 四半期 決算説明会 質疑応答の主な内容

1. 日本事業の営業利益増加（前年同期比約 10 億円増）の要因について、新型プリンター投入効果、サプライの前倒し需要、その他の内訳は

- 各要因を金額が大きい順に並べると以下の通り
- 増益要因：新型プリンター投入効果、中東情勢悪化や価格改定を見越したサプライの前倒し需要
- 減益要因：新人事制度導入や DX・ガバナンス人財の採用による人的資本投資の増加、M&A 関連費用（戦略投資）
- 他：粗利を重視した営業活動への転換や、開発・製造・販売推進が一体となった体制への移行により、新製品投入時の立ち上がりが円滑に進んだことも大幅増益の要因となった

2. 業績予想に関して通期を上方修正した一方、下期を据え置いた理由は

- 売上高：Q1：前倒し需要により期初予想を上回って推移。下期：前倒しからの反動減を見込む一方で M&A 効果（約 18 億円）等により期初計画を据え置いた
- 営業利益：Q1：新型プリンターの好調な販売とサプライの前倒し需要により期初予想を上回った。Q2：コスト増の影響が顕在化し期初予想比で減益、下期：コスト増を価格改定効果により吸収し期初予想を維持

3. 2026 年 6 月にグループ化した平野屋物産の業績を予想に織り込んでいるか

- FY26 通期で売上高 25 億円を反映している。営業利益は取得原価配分（PPA）の算定中であるため織り込んでいない
- PPA 算定完了は今年度中を見込む

4. Q2 の営業利益予想が Q1 実績比で低下する背景は

- 中東情勢の影響などにより原材料コストのさらなる上昇を見込んでいる
- コスト上昇に対して合理的な範囲で価格改定をお願いする方針だが、改定交渉の妥結には一定の時間を要するため、Q2 は粗利率の低下により Q1 比で減益を見込む

5. Q1 に発生した一過性費用の内容と金額は

- M&A（戦略投資）に関連する費用であり、約 2.2 億円を計上した

6. 中期経営計画の拡張領域における取り組みの進捗は

- 血液・検体 SCM では、シンガポールの商談が進展したほか、マレーシアの血液学会で PJM 技術を紹介し認知度向上とビジネスエコシステムの構築を図った。欧州・アジアを中心に 2026 年 6 月末現在で約 100 件の商談が進行
- スマートパッケージングでは、平野屋物産のグループ化により今後の提供価値向上が可能となった。当社の自動認識技術を活用したユニーク ID のパッケージへの付与により創出される価値を、お客さまへのサンプル提案活動や展示会での紹介を進めている。これまでに接点のあった購買部門に加え、マーケティング部門やブランドオーナーからも関心を得ている
- サーキュラーエコノミーでは、リサイクル関連事業者などと連携しながら認知度向上を進めており、商談機会も徐々に増加

7. キャピタル・アロケーションの進捗状況について教えてください。

- 戦略投資、事業基盤投資、株主還元はいずれも計画通り進捗。戦略投資は今後本格化する
- 株主還元については今回の自己株式取得を含め、中期経営計画で掲げた総額 100 億円から 200 億円のレンジ内で進捗している
- 今後も中期経営計画の着実な実行により、さらなる資本効率向上を行う

8. 自己株式の取得 20 億円を実施した理由は

- 中期経営計画（FY25-28）の折り返し地点で実施する株主還元施策として実施を決定
- 発行済株式数に対する割合は約 3.1%、取得単価 2,500 円の場合 2.4%であり、一定のインパクトがある規模と認識
- 今後の成長戦略に向けた投資も継続するため、投資と株主還元のバランスを勘案して 20 億円を実施

（以上）